苦闘する北海道観光

新型コロナウイルスの影響で、札幌市内のホテル建設計画が白紙に戻ったり、延期されたりするケースが増えている。インバウンド需要が消え、回復も見通せないからだ。

道内を訪れる外国人観光客（２０１８年度に３１２万人）を「２０２０年度に５００万人」に増やすという鈴木直道知事の公約も実現は絶望的となった。現状では、外国人は観光客全体の１割に満たないが、一部の有名温泉地を含め、過度にインバウンドに依存した地域は深刻な打撃にあえぐ。満員の旅客機で運び、大型ホテルを満室にするというスタイルは変容を余儀なくされるだろう。

洗練されたリゾート地として世界に知られるニセコも例外ではない。海外富裕層向けのコンドミニアムは、スキーシーズンには１室で１泊２０万円を超える。料金を下げて国内客にシフトする動きも出ているが、ブランド価値を守るため、閉館してコストを絞り、コロナの沈静化を待つ施設も多いという。

来年夏の東京五輪・パラリンピック、中でも札幌で開かれるマラソン・競歩への期待もあるが、これも有効なワクチンや治療薬の開発と普及にかかっている。

とはいえ、少数ながらも、立ち直りのきっかけをつかんだ事業者もある。

東川町の天人峡温泉には、宿は一つしかない。周囲には商店もなく、いわゆる秘境だ。この宿もキャンセルが相次いだが、旅行会社が「３密回避」に適した温泉として売り出すと、東京からも予約が来たという。

もともと道内の観光客の９５％は国内客で、その９割近くは道民だ。コロナの先行きが不透明なだけに、道内を中心に国内客のリピーターを増やす工夫が一層求められよう。

現在をコロナ後への準備期間とみなして、インバウンド向けに、オンラインの語学教室やＰＲ用スマホ動画撮影の研修を行う旅行会社もある。五里霧中でも必死に活路を模索している。

北海道新聞社　編集委員　土江　富雄